

大好き！絵本

初瀬 恵美



『いつでも会える』
絵・文：菊田まりこ
出版社：学研

長年、子どもの成長を見守ってきたモースケが9月に亡くなりました。12月で17歳、人間でいうと90歳ぐらいになる老犬でした。

朝早く登園してくる子は、園長と一緒にモースケの散歩に行くのを楽しみにしていたり、新入園児の子は、モースケに会うのを楽しみに登園してきたり、ただ居るだけで、みんなの心を癒してくれる犬でした。

食欲が落ちたりすることもありましたが「高齢だけど、とっても元気だね。」といつも話題にのぼるほど元気でした。しかし、急に具合が悪くなり入院。二度と元気な姿で保育園に戻ってくることはできませんでした。

その日はあまりにも突然にやってきました。今もまだ「モースケどこいったの？」と聞いてくる子がいます。子どもにとって「死」とは、いったいどんな感覚なのでしょう。今月は、死をテーマにした絵本『いつでも会える』をご紹介します。

主人公は「シロ」。みきちゃんの犬です。みきちゃんと一緒にいたときは、毎日が「**楽しくて 嬉しくて 幸せ**」でした。ところが、ある日突然、みきちゃんが死んでしまいます。でも、犬のシロにはわかりません。シロは、みきちゃんに会いたい思いばかりがつのります。どこを探しても、みきちゃんはいません。「**さみしくて かなしくて 不幸**」な気持ちになります。しかし、ある日のこと、夢の中にみきちゃんが出てきます。そして「**シロ、シロ。もう、いっしょに あそべなくなったね。いっしょに ごはんもたべられなくなったし、あたまも なでて あげられない。でもね、そばにいるよ。いつでも会える。今もこれからも ずっとかわらない。**」とシロに話しかけます。シロは目をつむると、みきちゃんのことを考えると、「いつでも会えるんだ。」と気づき、死を受け入れて、元気を取り戻してゆくお話です。



優しい、シンプルな絵。それだけに、シロとみきちゃんの絆の深さや、シロの気持ちがひしひしと伝わってくる絵本です。「死」を受け止め、前向きな気持ちにもさせてくれます。

モースケが亡くなった日は土曜日でした。登園していた数人子どもたちと一緒に最後のお別れをしました。子どもたちは思った以上に「死」ということの意味が不確かなようで、涙を流している私たち大人の顔をじーっと見つめていました。モースケの体に土がかけられていくとき「かわいそうね。」と口々に言っていたのが印象的でした。

命の重さを感じる機会が減ってきている現代。中には「死んでも生き返ることができる」と思って成長している子どもたちもいると聞きます。そんなことは決してない、ということ伝えてくれました。そして、思い出の中で生き続けるという事も……。モースケが亡くなってから、卒園した子どもたちや保護者の方、退職した職員も含め多くの方々が追悼の言葉をくださったり、お花を供えにきてくださいました。あらためて、モースケの存在の大きさを感じさせられました。多くの方の思い出の中で、しっかりモースケは生きているようです。



今月はモースケの追悼と共に「死」と向き合い、心を暖かくしてくれる絵本を紹介させていただきました。

